

しよくへい  
食紅

作・<sup>ひらの</sup>平野 <sup>まさき</sup>正喜

2018/10/07

【登場人物】

- ・ 課長（56）：占領下の某国政府食料省食品課長。くたびれたスーツ姿
- ・ 松下（30）：課員。作業服姿
- ・ 雛子（27）：課員だが、占領軍本部へ通訳として出向中。颯爽としたスーツ姿

【舞台】

- ・ 占領下の某国政府食料省食品課の部屋。課長の机と椅子がある。

【脚本】

中央の課長席に課長が座り、上手に松下が立ってハタキをかけている

- 松下　　そういえば、終戦記念日ですね。
- 課長　　敗戦無念日だがな。
- 松下　　それにしてもヒマですね。去年の今頃は配給業務で食品課もてんてこまいだったのに。
- 課長　　配給の終了と同時に、他の仕事も取り上げられたからな、ついでに部下まで。
- 松下　　僕一人残されましたが(笑)
- 課長　　よりによって松下がな(笑)
- 松下　　えー？
- 課長　　食料自給計画はウチがやるはずだったのだがなあ。
- 松下　　占領軍の指示なんですから仕方ないですよ。

雛子が颯爽と入ってくる

- 雛子　　ただいま戻りました。
- 松下　　お帰りー。帰任が決まったの？
- 雛子　　いいえ。松下先輩、だったら先に課長に連絡があるはずでしょ？  
少佐が休暇を取られたんです。
- 松下　　ウチから占領軍に出向して何年だっけ？
- 雛子　　まだ1年ですよ。
- 松下　　にしては、馴染んでるよなあ。
- 課長　　占領軍はいち食品課長のことなんか考えてないし、われらが食料省も仕事のない食品課に情報なんて流さないよ。

雛子 課長～、すねないでください。  
松下 ホントにもう。  
雛子 そうでもないって話を持ち帰って来たんですから。  
課長 なんだね、松下もよこせってかい？ いいよ、くれてやるよ。  
松下 えー？  
雛子 違います。では、占領軍ゲオルグ少佐からの指示を伝えます。  
課長がずっと研究されてきた食紅の件、予算を与えるので推進せよとの仰せです。  
松下 え？  
課長 なんだって？  
雛子 ですから、食紅です、食用色素。研究されてましたよね？  
課長 あ、ああ、もちろんだ！でも、なぜ、占領軍の少佐が私の研究のことを！？  
雛子 私が寝物語にお話ししました。  
課長 寝物語？  
雛子 あ…、とにかく少佐は課長の研究にご興味を持たれました。食品課が単独で担当  
できますよ。  
課長 おお！（涙）そうか！ありがとう、ありがとう！  
実は私はそろそろ職を辞して田舎に帰ろうかと思っていた。  
嬉しいよ。私にまだ仕事があるとは！しかも食紅だ！  
松下 食紅ってなんでしたっけ？  
雛子 先輩、敗戦で忘れちゃったんですか？  
戦時中までは食品課の飲み会でいつも課長がくどくど言ってたじゃないですか。  
課長 くどくど？  
雛子 あ…、  
松下 ああ、思い出したよ。でも何だっけ？  
課長 （あきれ果てて）食紅は我が国の文化だよ。  
松下 はあ。  
課長 （気合を入れ直して）まあ聞きなさい。  
雛子 …、  
課長 （遠くを見るように）我が国古来の食品は非常にカラフルだったのだよ。  
沢庵は光輝く黄色、赤飯は朝日を思わせる赤い色、山菜漬は季節を問わず輝く緑色、  
ナスは煮ても焼いても見事な紫色。

課長は机の下から沢庵、赤飯、山菜漬、ナスを順に取り出して並べながら。

課長 それを実現してきたのがわが国が世界に誇る技術であり文化である食用色素、  
食紅なのだ。

沢庵に黄色一号を、赤飯に赤色一号を、山菜漬に緑色一号を、ナスに紫色一号を加えることで、それぞれがそのあるべき美しさを存分に発揮していたのだよ。

この美しき文化が滅びたのは、侘び寂びとか、儒教的文化だとか、墨絵とかの地味好きなくだらぬ連中のせいだ。

松下 はあ。

課長 しかも、戦争に突入した途端に、わが国の国民総動員戦略には似つかわしくないとか軍部に目を付けられてしまい、食紅文化は潰<sup>つぶ</sup>えてしまった。

だが、私は諦めなかった！

松下 (あまり感動せずに) へー。

課長 いつか必ず日の目を見ることがあるはずだと、食紅研究の成果はすぐに生産可能なレベルにしてある。

雛子 (ほれ込むように) さすがです、さすがです、課長！

少佐は終戦直前のわが国の自粛政策が、あるべき文化を壊してしまったと、そして、それらを復興することでマイナスのループを断つことも、我々占領軍の役目だとおっしゃっています。

課長がお考えの食紅文化もまさにその一つでしょう。

では、占領軍が把握している生産業者の生き残りリストと合わせて、さっそく生産計画を！

課長 よおし、やるぞ！（松下の背中をパーンと叩く）

松下 痛ってー。

課長 頼むぞ、松下！

松下 (おずおずと) あのう、食紅って、ホントに必要なあるんですか？

課長 なにい？

暗転

松下 (影の声) 1年後

明るくなると、やつれた姿の課長が席に座り、松下は少しうなだれて立っている。高価そうなコートを羽織った雛子が入ってくる。

雛子 ハロー、課長。退任のあいさつに参りました。

松下 (驚いて) 退任？ 退任だって？

雛子 はい、先輩、本日付けで食品課を退任することになりました。

課長 (驚かずに) 少佐について占領国に行くのか？

雛子 いいえ、少佐から支社長を命じられましたので、この国に残って食紅事業を統括し

ます。

課長 やはりそういうことか。

雛子 どういうことですか？

課長 食料省のトップから警告が来たよ。食品課は占領国の1企業に肩入れしすぎだと。

雛子 それは心外ですね。

課長 ああ、心外だ。しかし、事実上そうなっているんだから仕方ない。結局、少佐が影で持っている会社のわが国での売上げに大きく貢献してるのだからな。

松下 食紅の影響でバカ売れしてるのは沢庵でも赤飯でも山菜漬でもナスでもなくて、ジェリービーンズだなんて、今日初めて知りましたよ。

松下はポケットから極彩色のジェリービーンズを取り出して示す。

課長 しかも、わが国では少佐の会社が独占しているからな、ジェリービーンズは。雛子 ありがとうございます。お陰様で本国並みの業績を上げさせていただきました。少佐もお喜びです。

課長 聞かせてもらえるかな？

雛子 なにをですか？

課長 最初から、こういう目論見だったのかい？

沢庵だの赤飯だの山菜漬だのナスだのという我が国古来の食品をカラフルにすれば、ジェリービーンズを売りやすくなるという。

雛子 はい、その通りです。少佐が見抜いていました。この国の国民は心にタガを掛けるのが好きで、それが憤み深さだと誤解していると。

松下 酷い言い草だな。

課長 だが、間違いじゃない。

雛子 でしょ。

で、そのタガを外してもよいと思わせる何かを示して肩をちよいと押せば、あっさりと宗旨替えします。

食べるものはカラフルで良いんだと思わせることで、占領国のおやつの象徴的存在であるジェリービーンズを狂ったように買い始めたのです。

後は右肩上がりでした。

課長 まあ、それでもいい。私だって研究成果である食紅がわが国のみならず占領国でも売れているというのは嬉しい。しかし、困ったな。

雛子 大丈夫です。ダミー会社がいくつもありますし、退役しても占領軍に顔が利く少佐がいますから、いくらでも手を打てます。

課長 そうか。

雛子 では、これで。

松下 あの～課長。  
課長 なんだ？  
松下 (おずおずと) やっぱり食紅、食用色素って、必要ないですよ。  
課長 おい！

暗転

松下 (影の声) さらに1年後

明るくなると、さらにやつれた姿の課長が席に座っている。  
松下は完全にうなだれて立っている。  
さらに高価そうなコートを羽織った雛子が新聞を持って入ってくる。

雛子 残念です。  
課長 ああ。  
雛子 (新聞を指で弾いて) 赤色食紅だけならまだしも、黄色食紅にも発がん性があると報道されてしまいました。取引は打ち切ります。  
課長 そうか。好きにするといい。  
雛子 失礼します。

雛子は出ていく。

松下 だから僕は嫌いだったんですよ、こんな毒々しい色、ちっとも美味しそうに見えないし。  
課長 手のひらをかえす、か？  
松下 食品課の改組も決まりましたので、僕は自然食推進部への異動希望を出しました。課長はどうされますか。  
課長 私はどんな形でもここに残る。窓際でもなんでもいい。食用色素はこれからだ。まちがいなく我が国の主幹産業になる。この程度のつまづきに屈するようなヤワなもんじゃない。発がん性ゼロの食紅を開発して巻き返してやる！  
松下 ダメですよ、だって人工物でしょ？  
自然界にないものを使って色をつけるなんて、やっぱりダメですよ。  
課長 ちょっと待て！自然界ってなんだ？ 俺たち人間は自然界に含まれてないのか？  
松下 え？  
課長 含まれているだろ、犬もサルもキジも人間も。だったら、人間が地球上にあるもの

をいじって作ったものだって、自然界の一部じゃないか？

松下 え、まあ、そうです。

課長 しかもだ、自然界にあるか、ないか、どうやって判断できるんだ？

松下 それは、まあ、大学の先生方が…。

課長 俺たちは地球上の全てを把握してるとでもいうのか？

松下 え？

課長 (足踏みして) 世界中の地中を掘り起こしたのか？ ちょっと掘れば何がでてくるかわからんぞ。

松下 そ、それは…

課長 (平泳ぎの動きをして) 深海はどうだ？ 海溝の底を流れる海水の成分を全て解析できてるとでもいうのか？

松下 (反論できないので口をパクパクさせる)

課長 (空を指さして) 大気圏最上層もこの地球の自然の一部だろ？  
宇宙ギリギリを漂うチリの成分がわかっているのか？

松下 (反論できないのでさらに口をパクパクさせる)

課長 そういうことだ、自然界の全てを知ってるというなんて、うぬぼれも甚だしい、ってことだ。なーんにもわかっちゃいない。

松下 …あ、

課長 なんだ？

松下 元素記号表とか学校で教わりましたよね、あれで全てじゃないでしょうか？

松下は机の上に伏せてあった元素記号周期表を拡げて示す。

課長 わははは、百歩譲って『そうだ』と言ってあげよう。

で、この表の末尾の元素群はなんだ？ 自然界にあるものか？

課長は元素記号周期表の右下（ウラン[U]より先）を指さす。

松下 あ…、人工元素です。核反応によって人工的に作り出された…。

課長 だろ、元素が自然の全てといいながら、人工元素が入っているわけだよ。  
人工物なんて自然の端っこにぶら下がってる程度の自然の付属物なんだよ！

松下 でも…

課長 まあいい、そうだ、千歩譲って赤色一号色素が天然物じゃなくてダメならば、  
茜色の天然アカネ色素がある。

課長は机の下からセイヨウアカネの鉢を出して机の上に置く。

課長 この赤い根からも食紅ができる。天然の色素だ。俺はまだまだ戦えるぞ。  
雛子 (影の声) もしかして、いつか、アカネ色素にも発がん性でちゃうかもね。  
課長 (見回して) 誰か何か言ったか？  
松下 あの～課長。  
課長 なんだ？  
松下 (きっぱりと) やっぱり食紅、食用色素って、必要ないですよな。  
課長 おい！

幕